



第 39 回 昆虫学格致セミナー

ムシのいい話

～食糧危機ならずとも虫を食べるべき理由～

井内 良仁 (山口大学大学院 創成科学研究科 農学系)

昆虫食と言うと、「いや私は結構」であるとか「本当に食べるものが虫以外に無かったらその時考える」などの意見が聞かれる。昆虫食は果たして“罰ゲームのゲテモノ食”あるいはもう少し発展した“食糧危機に備えたサバイバル非常食”なのだろうか？

2013年にFAO(国連食糧農業機関)から食料ならびに飼料としての昆虫資源の積極的な利用を進言する報告書がまとめられ、日本の各メディアでも取り上げられた。このFAO報告書では主に昆虫食が持つ「栄養的利点」「経済的利点」「環境的利点」が強く指摘されている。確かに現在でも世界人口の1割程度は栄養不足状態と考えられ、近未来の食糧危機に備えた代替食の準備と探索は確かに必要であるが、一方で世界人口の4割が栄養過多という状態の方がそれ以上に深刻な問題であろう。たださえダイエットが持て囃される諸国において昆虫食の認知と普及を考えたとき、「高栄養」は避けられることはあれ飛びつかれる可能性は低い。しかし昆虫食に健康増進に寄与する食品機能性という付加価値があれば話は違ってくる。

本研究室では日本における昆虫食の認知と普及を目的として昆虫食の持つ食品機能性に注目し、マウスを用いた食餌実験ならびに成分分析を行ってきた。高脂肪食によってマウスをメタボ状態にしつつバツタを与えた食餌実験から、体重増加抑制ならびに脂肪蓄積抑制効果など、いわゆるメタボリックシンドローム抑制効果が確認された。培養細胞を用いたアッセイから、数種の昆虫抽出液中には抗酸化、抗炎症あるいは細胞保護活性も見つかっており、「昆虫食」という枠を超えてサプリメントさらには創薬といった可能性も期待できると考えている。

本セミナーでは、昆虫食が有する実力などを含めた現状と今後期待される新たな可能性などの未来について、できれば“昆虫料理をつまみながら”議論したい。

とき : 2019年10月18日(金) 13時30分～15時30分

ところ : 京都大学農学部 1階 E-103号室